

大正～昭和初期における衣生活の変化
 ～婦人雑誌『主婦之友』を中心として～
 戸板短大 ○小林操子 放送大教養 酒井豊子

目的 明治以降、女性を対象とした婦人雑誌は数多く出版された。なかでも大正初期創刊された『主婦之友』は多くの女性たちに読まれていた実用的な雑誌である。婦人雑誌は時代や世相を反映し、女性たちの生活や意識を知るうえにおいても重要な資料である。大正から昭和初期にかけて『主婦之友』衣生活関係記事を中心に調査し、人々の衣生活の変化について考えた。

方法 調査対象雑誌『主婦之友』について、大正6年3月(創刊号)～昭和10年12月までの時代、その目次から衣生活に関する記事項目をえらび1 和服関係、2 洋服関係、3 手芸関係、4 その他 の4つに分類し、各年度、月別に整理し、記事内容とページ数の変化について分析をした。また、家計記事のなかの被服費についても検討を加えた。

結果 『主婦之友』衣生活関係記事は創刊当初、和服関係が中心であったのが大正後期になると洋服関係や手芸関係記事が多くを占めるようになる。洋服や編物が衣服として普及していく過程を知ることができた。内容は一様に仕立て方や編み方などが中心であり、家族の衣服を仕立てることは、主婦の大事な仕事のひとつであったといえる。これらの記事の多くを書いたのは当時の教育家たちであった。一方、家計記事のなかの被服費から衣生活をみた場合、実収入の高低や家族人員と関係なく低い金額に押えられ、衣服を大切に着用していく庶民の衣生活が語られていた。衣生活関係記事は、衣生活の経済と合理化をめざし、新しい時代の情報と実用的な情報を提供し、女性たちを教育、啓蒙していったといえる。